
new world.1

佐藤 寒い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

new world . 1

【コード】

N4288I

【作者名】

佐藤 寒い

【あらすじ】

世界の国々が核という圧倒的な火力の元ひとつにかされた後の世界です

それでもものんきに過ごす普通の高校生正志。はちゃめちゃんな正志の彼女加奈子。そんなこんなで世界に牙を向くお話です。ちなみにまだまだ序章です

(前書き)

まあ最初はつまんなくしてあるから後らへんから楽しくなると思うよ。

世界は平和の名の下にひとつになった。

差別があるから戦争がおきる

差別があるから貧困ができる

なら差別をなくしてしまおう

そつどつかの大統領が唱えた

遠い未来のお話

でも場合によっては今すぐおきてしまつかもしれない世界の4人の
お話

11月2日朝の7時半

俺。正志は飯の入ってる茶碗を片手に口をもぐもぐさせながらテレビを見ている。

「10月30日の昨日。アフリカ州で再びデモがありました。」
「そう綺麗なアナウンサーが少し悲しそうな眼差しで言う」

「その模様をVTRでお伝えします」それと同時にテレビに血まみれで棒を警官に振るう中年の男性が出てきた。

世界のかつて国々といわれた場所は「州」という地域名になった
アフリカ州。アフリカ大陸の小さな国々がいつぺんに統合されて出
来た州といわれてる

(ふうーん。そんなことがあったんだ)

「主犯はボン・ザグラスという元王族のようです。」

「正志！まだご飯食べてるの？はやく着替えなさい！」うぜー母親
の怒鳴り声でしようもなく早く食うことにする

無理やりご飯を胃袋に入れ箸を置き階段を上がる自分の部屋に行く
ためだ

(ツたく毎朝うるせーばばあだなあ) 心の中で毒づきながら親の言
うとおりさっさと着替える

制服に着替えエルメスのバックをしょって家から出ようとしたとこ
ろで親に声を掛けられた

「私たち旅行に行っちゃうけどちゃんとご飯食べなさいよ！。それ
とお土産期待しててね」

親は旅行といってるけど実際はアフリカ州の恵まれない子供たちの
ために井戸を作ったり自費

で給食費をはらったりとかしてる。まったくえらいものだ。

「わかってるよ。それといつまでも子ども扱いすんな！」

「なにいつてるの！いつまでも私の子供でしょ！」親のほづが一枚上手だ

「あ〜うぜー」なんかわかんねーけどむず痒くなったからそういつてやった

自転車に乗って高校に行くことにする。

王族である私。いや王族であつた私だ。

世界は統一された。そしてかすかに州という国の名残が残つた。

私は存在価値をなくした。世界が統一されてたくさんの大事であつたはずのものを失つた。

王族という肩書き。何もしないでもエリートとして上級社会へといけたはずの未来。

「世界」をあの「国」をうらむ。大国「アメリカ」。だつたはずの今はセントラルとよばれている。

セントラルだけ州がついていない。みなそれに気づいてる

けど誰も文句など言わない

アメリカは1000発の核を手に入れ長崎広島以来世界が統一される3年前

一発打った。中国北京へと。

それで終わりだ。もう世界の大国アメリカにだれも文句などいう国はなくなった

「核の必要のない世界へ！平和な世界へ！」大統領のその言葉に国民は賛嘆の声をいつせいに挙げる。

「世界をひとつにしましょう！」そこで世界はかりそめの平和から本物の混沌へと変貌することになった

世界の国々の代表のすべて（中国を除く）をアメリカに招きいれ会谈した。

そこでアメリカ大統領は世界各国の代表に世界の国々を統一しないかと提案し

「反対国”0”賛成国”192”ありえない結果となった

まあ当然の結果だが

逆らえる国など中国以外になかったのだ。中国代表もろとも北京市民ともども消し炭と化した

そして世界はひとつになった。正確には「世界」は「圧倒的な火力」によって「ひとつ」に溶かされた。が正しいだろう。

「くだらない。」自分がいやになる。

「何を考えているんだろう。私は」私以外誰も居ない自分の部屋で
そうつぶやく

無造作に足に置かれたバッグを開きそこからスケジュール表をとり
だす

それを開く

11月2日：18時30分作戦決行

「もうすぐか。」そうつぶやく過去を振り返る

思えば今までどれほど犠牲にしてきたのだろう。

家族。恋人。友達。金。すべては復讐のため。

「憎い！！」駄々こねるように。どこか空しさを尾に引きながら。
叫ぶ

叫んだ後で空しさを感じた私は償いのようにトイレの前の鏡へと足を
運ぶ

自分の顔を見る。目は充血してる。髪はボサボサだ。

「これが王子の面か？」自分を見つめそうつ感想を漏らす

「っふ……はは……。」悲しみすらこみ上げる。もうないとお
もっていたのに

まあどうでもいい。三日前の作戦は成功した。

勝利の余韻などどこにも無いな……。自分を嘲いつつ

ポケットにいれといた拳銃をとりだしそれを眺める。

何人殺せるんだろう。セントラルの犬どもを・・。

みつめ飽きた頃。なにげなく拳銃を自分の目にその銃口をむける

「・・・・・・・・・・・・・・・・」「言いようのない恐怖がこみ上げてくる。

撃ちぬかれた自分を想像してしまう

心臓が激しく高鳴りだす

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。」いつの間にか冷や汗をかいていたようだ

拳銃を洗面所に置き深呼吸をする。

再び拳銃をポケットにしまう。

今日はもう寝よう。

ニューヨークの街を歩く。そして柄の悪い青年の姿が目に入る。

ジャーナリストの私ブラウスは正義感だ。それは損なことなのだ・
。。

若者がかんだガムを道路に吐き捨てる

「まって！」若者をよびとめる

「なんだよ？ババア」いかつい視線を送ってくる

「つむ。だめでしょう！ちゃんと紙に包んでゴミ箱に捨てなさい！」
そういつて柄の悪そうな青年の手をつかみ説教する。

ニューヨーク街の若者はまったく自分に対してたいした自信もない
くせにかっこつけたがる。

それはこの町に限ったことじゃなくいろいろな国をまわってみただ
どどこもかしこもかっこつけるだけの若者ばっかだ。

「なんだよ！うっせなあ」そういつて私の手を振り払ってすたすた
と歩いてく

「まったく・・・。」そうなげきつつもバックからティッシュを
とりだしはいたガムを拾いゴミ箱へ投げ捨てる

自分に対しても情けなくなってくる。損な性格だつてことはわかっ
てるつもり

つてこんなところで時間つぶしてる場合じゃなかった

「会社に行かないと」だれにいうわけでもなくつぶやき急ぎ足で会

社まで歩いてゆく

自分のイスに座りおととい調査を終わらしたアフリカ州の状況についてまとめていた

「ブラウス。きてくれ。」編集長に呼ばれた。その編集長は若かった。腕利きなのだろう。

「なんででしょう?」

「もう一度アフリカ州へ飛んでくれ。」

「なぜです?」

「これを見てくれ」そういつて若すぎる編集長が机に広げた資料は「これは……。」中年の浅黒い顔した男が軍人の頭に黒い拳銃をつきつけている写真がそこにはあった

「おそらく近いうちに弾圧が起きるだろう」表情を変えずに言う

「ビッグニュースですね……。」

「さらに詳しくしらべてこい」反論の余地はない

「わかりました……。」

「これがチケットだ。」どこまで用意周到なのだろう。それを渡される。

「ありがとうございます」

ビザは必要なくなった。世界はひとつなのだ。ニューヨークからロサンゼルスにいくのにビザが必要ないように州から州へいくのにビザがなくなった

「今すぐ飛んでくれ。前回の調査のまとめはほかのやつに任せる。」

「はぁ……。」「チケットを見る11月2日9時55分発エクス空港

「50分後?!」

「そつだ。支度をちゃんとしておけ」

「いくら近いからって!」「ここから空港までは車で15分なのだ

「……。行け。」「冷たい声色でそういわれちゃしょうがない

「はい……。」「あきらめるように自分の席に戻ろうとする

「待て。」

「はい?」

編集長がおもむろに机から札束を取り出す

「もってけ」

「これは?」

「換金しといた。」ホントどこまで用意周到なのだ

「手間が省けるだろう?」「少しにやけてそういう編集長に

「ありがとうございます」「ふかぶかと頭を下げ

急ぎ足で自分の机の上にあるマイバックを肩にさげ会社のビルから
空港へと向かう

「空港まで。」そうタクシーの運転手に告げる。それと同時に車が
走り出す

タクシーの運転手の営業トークに適当に付き合っていたらあつとい
う間についてしまった

「15ドルです」財布から10ドル札を二枚取り出し

「おつりは結構よ」「そそくさと空港の中へと入る

「ありがとうございます」

間に合いますようにと心の中で念じながらいそいで空港のロビーへ
と急ぐ

「9時40分。まにあった……。」少し走ったので疲れた

チケットを空港のスタッフに渡しスキャンしてもらった後で飛行機
の中に入る

イスに座りノートパソコンを開く。要するに暇つぶしだ

土曜の休日 11月5日時刻は夜の11時

「毎日つまんねー……」そう自墮落的な言葉を自分の部屋で叫ぶ俺

俺こと普通の高校に通う17歳は自墮落的怠惰な人生を過ごしている。

楽しみはカラオケとかゲーセンとか……。

人生むなしいと感じる今日のこのごろ。先生は機械的に話を進めてゆく

親は人生を知ってか知らずかガミガミ勉強しなさいだ。

おれはもう17歳だ。それなりにわかってるつもりなのだが……。

なのにだ！目が合えば勉強しなさいとはどういう了見だ！

まあたしかに勉強さぼってるけど！言うこと聞かないけど！たまに悪さするけど……。

考えれば考えるほど自己嫌悪に陥ってゆきそうだ……。

親にあんたは何様だ！といわれた……。はあてめーこそなにさまだよ！やくざ並みの声色で反論してやったが。

親が居ないせいなのかも知れないが今自分の人生を振り返ってみた。

おれ……偉くもなんともね。おれ……だめ人間だ。

はあ……。親に月一万貰う。食事代……。食事代のはずだ。

もっばらカラオケだ。使うのカラオケかゲーセンだ。

「はあ……。やってらんね。」ベッドでねっころがっていたが無理やり起き上がる

最近大人の階段上がったばかりの俺。

上がった。そうさ童貞を卒業した。「わははは！！！！！」

キモイぜ正志。何考えてんだよ……。一人で……。

自分で自分のボケにノリツッコミを心の中でする……。

正直予想外だった。正直俺はスケベだ。でもする気なんてなかった。

男子は案外ピュアな生き物なんだぜ？

それがまさか誰も居ない教室に呼び出されて……。

もういい。思い出すのはやめよう。

自分の部屋からでて階段を下りようとする

「はぁ……。」意味ないため息

「ブーーーーー」机の上にほったらかしにしてある携帯が鳴り出す
急いで机のほうへ向かう

「なんだよ……。」携帯を開く

” 一件の着信があります”

だれだよ……。

着信履歴をみる

鈴木加奈子か……。俺の彼女（成り行きで出来てしまった）

掛けなおすか……。

プルルルルル……。

「正志?!」小さい声だがあせていることが伺える声

「何があつたんだ?」

「変な人に追われてるの!」

「変な人? どういうかつこうなんだよ?」

「黒い服着てる。いかつい感じの人!」

「ヤクザ・・・・・・・・それが頭に浮かんだ。」

「ヤクザ?! あれってヤクザなの?」

「ヤクザ以外にだれなんだよ・・・・。」加奈子の天然にため息をつく

「私殺されちゃうの?!」それは無いと思うが

「ってかなにしたんだよ?」冷静につっこむ

「ぶつかってきて謝らないから股間蹴り上げたら追っかけてきた!」
わお。バカだ

「死ぬ。男子の股間蹴るとかマジ死ぬ。」心の底からそう思った。
まあ正しい判断だと思うけど。

「えへへ〜ごめん〜」イラつく

「とりあえず俺んちこい」「しょうもねーし。」

「うん!」

「うん! っって俺んち来れる状態なのか?」

「駅も近いし多分大丈夫だともう」

「ならいいけど・・・・気おつけるよ。」って何で俺こんなに冷静なんだ?

「じゃ切るね。」のんきな声と同時に電話が切れる

.....

「.....つてか.....も
しかしたら.....ヤクザ・俺んちに来ちゃうんじゃね？」
いまさらの事実

「まあいつか。」眠くなったのでベッドにダイブする

スウーイー.....。暗闇が近づいて
くる.....。プツン。正志は寝てしまった

鈴木加奈子こと私は歌舞伎町に居る。なぜいるかって？

興味本位だ

セックスに興味があったから好きな男子を襲ってみたりもしたりし
て.....。

勢いのままつきあたりもして。フフ

まあとりあえず今日はホストに興味が沸いて一人で歌舞伎町にきち
やいました。

そんなのんきな私。今ヤクザに追われています。

もう一度いいます。追われています。ヤクザに

最高の気分です。ハイ。

よしこの裏道を抜ければ……。駅がみえる。

「3・・・2・・・1・・・はあ！」ダッシュで駅まで走る

「いたぞ！追え！」いつかの黒い服を着たヤクザがおいかけてくる

改札へ100m12秒台の足で走る

「まてえ！」ヤクザが叫ぶ

誰が待つか！心で返答しつつ財布にいれてあるカードを改札にかざす

ピ！邪魔するものはもう何も無い

「まもなくドアが閉まります。」電車のアナウンスが入る

「よし！ナイスタイミング」

電車に乗り込むと同時にドアがしまる

どうだまいったか！心の中で勝利の雄たけびをしつつ

イスにどうにか座る。

「はぁ・・・疲れた」とりあえず深呼吸することにする

「スウーハアー」良し落ち着いた

池袋まで10分ぐらいかな・・・。

時間を携帯で確認する。夜の11時23分。

マサツチん家に11時40分ごろには着くかな？

携帯にイヤホンを差込み音楽を聴く。

「誰が愛してなんていったの？あんたの勝手に私を決めないで。

変わらない今日がよかったのに。変わった今日。

求めていたはずだった今はくだらない。

誰が愛してなんていったの？好きになんてならないで。

もう嫌なの。何もかもがいやなの。

お願いだから関わらないで

夢なんて子供の御伽噺

世界は乾いたすっぱいフルーツ

刺激がありあまるほどあるのに

無味無臭の口当たり

近づかない私は臆病者？それともさめた女？」

女子のロックバンドグループの曲が耳に流れてくる……。

曲を聴いてるうちに正志の顔が浮かぶ。

勢いで押してつきあってもらったけど

私のこと好きになってくれるのかな？不安になってきた

「ピンポン。」そんな腑抜けた音に起こされる正志

さっき寝たばっかだったっの……。

「だれですか？」そうやってドアをあけたら瞬間抱きつかれた

しばらく思考停止したところで頭が回り始めた

「加奈子！つてか巻けたんだ……。」

「こわかったよ……。」泣き出す加奈子に

どうしていいかわからずとりあえずべたに

「大丈夫だぞ。俺がついてるからな。」心にも無いことが口から出る

「マサッチいいいい……」泣かれてもしょうがないのでとりあえず家に入ってもらうことにする

「加奈子。とりあえず家の中に入ろうな。」

「うん……。」

とりあえず2階の俺の部屋へと連れてゆく。

「マサッチ……」ドアを開けたところで声を掛けられる

「なんだ？」

「……」
「りあえず中に入ろう」

「ん？なんだ？」特に気にするわけでもなく中に入る。

加奈子が地べたに座ったので申し訳なく感じた俺は

「ベッドの上に座れよ」やさしく声を掛けてみる

「え？うん。ありがとう。」

「ジュース持ってくるからまってって」

「ありがとう」「元気がなさそうだ」

一回に降りて冷蔵庫からレモンティーをとりだす。多分大丈夫だろ

う前飲んでたし

コップを二つとレモンティーをお盆の上に載せてもってゆく

ドアを開ける

「もってきた……」そこで言葉がどぎれる。口をふさがれたからだ

やわらかい何かで。加奈子の唇で

それと同時にレモンティーとコップを落とす

思考不能の俺の口にしたをからめてくる。

されるがまま少しして加奈子が舌を絡めるのをやめる

俺の頭に手を回す。

「抱いて……。」

何もいえない俺に

ゆっくり俺を抱き寄せるよつに手を回す

ベッドへ倒れるように引きずり込まれる

俺は今どうなっているんだ？頭の中にその言葉が浮かぶ

射殺した奴五人……。撲殺した奴……。3人……。マシンガンを手には殺しに酔っていた

「殺してやったぜ……。俺が殺した……。ははは……。」

ボン・ザグラスはアジトでそうつぶやく。

アジトといっても民家の地下に作った秘密基地。出入り口は400m北に離れた岩ノ下だ

しばらく手にもつマシンガンを眺めていると

「ボン・ザグラス様」部下のサンが声を掛けてくる

「なんだ？」サンは今時の若いやつらと変わらない服を身に着けている

「次の標的はどこにしましょう？」誰が見たところでテロリストの一員だとは思わないだろう

「セントラルの人間は全員罪びと……。セントラルのくそどもが集まるヨドムだ」

「ヨドムと言うと観光地の？」

「そうだ。あそこのホテルを爆破する」

「了解しました……。みなに伝えておきます」

「頼んだ……。」

サンがおもむろに電話を取り出す

「……俺だ」

「次の標的が決まった」

「ヨドムのホテルだ。格好の場所を調べておけ」

「頼んだぞ。」そういつてサンは電話を切る

「では……。」サンは有能な部下だ。私はサンに

「我らが神の加護を」無事を願う言葉を掛ける

「われらが神の加護を」サンはアジトから出る

11月6日の日曜朝の9時12分

裸の俺と裸の彼女

ベッドで気持ちよさそうに寝ている加奈子を見つめる

そっと加奈子の頭を撫でてみる。

「とりあえず。シャワー浴びるか」

家には誰もいない。いるわけが無い。親は4日前に旅行に出かけた
ままだ。

シャワーを浴びてたら親のことが気になってきた

ホームシックってやつか？今我が家にいいるはずなんだけどな

そんなノンキなこと考えつつシャワーを浴び終えた俺は

バスタオルで体を拭いてちゃっちゃと着替えをすまし

リビングへと足を運ぶ

ソファーそしてその前にテレビがある

ソファーに腰掛けソファーの上においてあったリモコンを手に取り
テレビの電源を入れる

すると同時に今日のニュースが流れてくる

「11月2日のテロについて日本人夫妻の渡辺 博 渡辺 良子氏
が死体で見つかりました。」

他の日本人被害者は出ていない模様です。」

「詳しいことはまだわかっていません。……」
あとだれかが痛ましいとか何とか言ってたような気もしたけど頭に
入ってこない

嘘だろ？両親の名前がテレビの上に映し出されている

俺の親のわけないよな？画面を凝視するも、渡辺夫妻。現地で死亡。
その文字が画面に映っているだけだった。

「アフリカ州で慈善活動に勤しむ夫婦だったそうです。」

「……………まじ？」すつとんきよんな声を上げる。

そのとき俺は頭が拒んだかのように何も考えられなかった

「ピンポン」回らなかった頭が回りだす

「俺の親死んじゃったのか？なんも連絡無いぞ？」

「ピンポン。」だれだよ。俺はまだ現実を受け止めてなかった

ドアを開く

そこには金髪碧眼の30歳ぐらい？の女性が立っていた

「……………どなたですか？」

外人は何も言わず

メモ帳を取り出して

「ハジメマシテ……ワタシハ……ブラウス……トモウシマス」

「はあ……。」

「アナタノ オヤカラ デンゴンヲ アズカッテ イマス」

「え？伝言？」

「アナタノ オヤハ シニマシタ」なに言ってんのこの人？

テレビのニュースがきこえてくる

「渡辺夫妻はボランティアでアフリカ州へ行っていたようです」

「近所でも評判の優しいご夫妻だったそうです」

「とても痛々しい出来事ですな。」

え？なにそれ？俺の親死んじゃったの？

マジで死んじゃったの？。

はあ？そんなわけ無いよな

はあ？訳わかんないんだけど？

はあ？はあ？はあ？現実が自分の体をどんどん蝕んでゆく。

「……………」

……………」

……………」

……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「マサシ クン！」外人に女性に声を掛けられ再び現実に戻される
俺の頭は真っ白になっていたと形容すべきだろうか？

真っ白というよりは脳みそをつかまれてぶんぶん振り回されて

吐き気に近い倦怠感が自分の頭中で起こっていたっていったほうが
正しい気がする

視界に写っているこのブラウスという外人が景色と同化していた

「デングンヲ・・・ワタシ・・・マス・・・」。「ブラウスという
女性が泣きながらその言葉を吐き出していた

そう言われ血と砂が少しいたぐしゃぐしゃの紙を渡される

「最愛の正志へ。」

「瓦礫の下敷きになっているから。字が汚いけど。精一杯かくね。」

「ちやんとご飯食べてる？お土産渡せなくなっちゃったね。」

「XXXXXXXXクレジットカードのパスワードはXXXXXだよ。忘れる
んじゃないぞ」

「私たちがいなくなっちゃうけどちゃんと高校行きなさいよ。」

「最後に私たちの分まで生きてね。by母より」

「はあ？・・・なんだよこれ？」悲しみがこみ上げてくる

「マジで死んじゃったのかよ？」わけ判なくなってくる

「・・・馬鹿じゃねーの？」怒りがわいてくる

「ボランテアで死ぬとか」呆れてきた

「どこのお人よしだよ？」尊敬の念が沸いてくる

あれ？雨が降ってきたのかな？頬に水の感触がする

あれ？目が熱くなってきた。あれ？この水すっぱいな

なんか胸をつかまれる感じがする。

「俺まだなんも親孝行してねーぞ？」なぜか口からそんな言葉が出る

ブラウスって言う女性はただ何も言わず下をうつむいている

「とり・・・あえ・・・ず・・・なかに・・・はいれよ・・・」

首を横に振っている。

「いいから・・・。入れ！」怒鳴る

外人は恐怖で目を見開きつつも罪悪感の浮かぶ眼差しで

下を向きながら無言で入ってくれた

ソファーに座らして、加奈子の存在を思い出した俺は加奈子を起こしに行くことにする

「エーと・・・なまえ・・・なんだ・・・」言葉がうまく出てこない

「あゝ・・・ごめん・・・」。「いまだに罪悪感が目に見える外人に謝る

「少し待ってて」どうにか言えた

二階の自分の部屋へと行く

「加奈子」加奈子を揺さぶる

「マサツチィ・・・」。「寝言を発している

「起きろ！」少し大きめの声で呼びかける

「うゝん・・・」。「どうにか起きたようだ

「どうしたのマサツチィ？目が真っ赤だよ」「どうやら俺は泣いていたようだ

「加奈子。悪いけど今すぐ帰ってくれ。」

「まさツチィ？なんかあったの？」鋭いんだな加奈子って

「ちょっとね・・・八八・・・親が死んだから・・・いろいろとね・・・
・・・八八・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」無言の加奈子

「だから・・・今日はもう帰ってくれる?」

「まさつちい・・・。」やさしく俺を呼ぶ

加奈子が昨日のように俺の頭に手を回し

俺の顔を自分の胸に押し付ける

「泣きたいときはおもいつきり泣きな」

やわらかい胸の感触

暖かい気持ち湧き上がると同時に親の顔が浮かぶ

「う・・・う・・・う・・・う・・・う・・・う・・・」

「大丈夫だよ」加奈子の声が聞こえてくる

「おかあさん・・・お父さん・・・が・・・しんじやった・・・」

「

「大丈夫だよ・・・」

しばらく俺は加奈子の胸に顔をうずめていた。

「う……う……う……う……う……う……う……う……」ただ俺は泣き続けた

そして

「ハックション！」加奈子のくしゃみで頭が一気にさめた

「あ……ごめん……」加奈子は裸だったのだ

加奈子の胸からでようとする

「だめ！」そういつてまた胸に俺の顔を押し当てる

「ふん……」自分の子供っぽさに笑えてくる

「もう大丈夫だよ……。ありがとな加奈子」

「ホント？」そういつと同時に腕の力緩めてくれた

俺はゆっくり胸から頭を離す

「あ……もう！」

「なによ？」

「なんでもね！」床にあるブラとパンツを手に取り加奈子に放り投げる

「さっさと着替える！」元気が出たようだ

「うん！」元気に返事をしてくれる。そのことがどうしようもなく嬉しかった

「着替えたら帰れよ……。」

「……やだ。」

「はあ？なんで？」

「帰ったらまさつちが寂しくてまた泣いちゃうから！」

「あのな……さつき客が来たんだよ。だから今日は帰れ」加奈子の言い訳に笑みが浮かんだ

「どんな客よ？」切り替えしてくる

「遺言を伝えに来てくれた外人さんだよ」事実を言う

「ふ〜ん……。まさつちの両親ほんとに死んじゃったんだ……。」

「ブラをつけながら加奈子が言う」

「うん……。死んじゃったみたい……。さつきニュースでも言ってたし。」加奈子の目を見つめそういう

布団の中で着替えを終わらしたところで加奈子が俺をじっと見つめ

「なんだよ？」あんまりみつめてくるから理由を尋ねてみる

「まさつち……。ずっと一緒に居てあげるからね」

「へ？」唐突な言葉にすつとんきよな声を上げる俺に

「だから！まさつちが一人にならないようにずっと一緒に居てあげるっていつてんの！」

嬉しさでただ笑みがこぼれた。

付き合ってまだ三日だぞ？プロポーズかい！そんなことを心で毒づきながら

着替えを終わらした加奈子がベッドから起き上がって俺の前に立つ

「話きいてんの？」きいてるよ

「返事しなさいよ」「フン……。」

「まさつ……。」お返しだ

加奈子の唇をふさいでやった

加奈子が自分の唇に手を当てる

加奈子は笑みを浮かべ俺に抱きつく

(後書き)

どう？感想よろしく。感想あつたら続き書くよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288i/>

new world.1

2010年10月26日05時46分発行